

## 五木の子守唄

いつかある新聞に、「五木の子守唄」のことが出ていた。筆者の名前は忘れたが、この記事のことを思い出し、切り抜こうとしたときには、何かに使ったとみえて、見つからなかった。「五木の子守唄」という文字の入った見出しが、どうして私の心をとらえたか。言ってみれば、私のノスタルジアのせいであった。といって、「子守唄」という、人間の心の故郷をあらわす言葉があるからというのではない。それも全然ないとはいえないが、私の場合はもっと個人的な事情があるのである。

この文章の筆者の言おうとしたことは、だいたいこんなことであった。「五木の子守唄」といえば、近ごろラジオでたびたび放送されて、全国的に周知のものになっている。ところが、実際にこの子守唄の生まれた熊本県球磨郡五木村に行って、村人の歌ってくれるのを聞くと、まるで感じが違うというのである。このことは何もこの筆者の新しい発見ではなく、「おけさ節」など

も、歌手の吹き込んだレコードをかけたなり、宴会の席で歌われたりするときのものと、本場の越後の海岸の砂丘で、北海の浪の音に伴奏されながら、土地の若い男女が入りまじって歌い踊るときのもので、よほど違うところがあるという。それはちょうど、野の花が野にあるときの自然の連関の系列から取りはずされて、床の間に活けられ、その部屋の建具や諸器具との間の新しい連関において位置づけられたとき、野にあったときはまるで変わった印象を、人間の情感の上にも与えるのと同じである。同じ「花の美」であっても、その花のおかれた「場」によって、美の様相が変わってくるのと同様に、民謡としての「五木の子守唄」が、その歌われる「場」によって感銘の質が異なってくるのも自然である。そしてその質的变化は、抽象作用という人間の営み（それは文化の悲しい宿命でもある！）を媒介とするのである。

民謡は、その地域の風土と生活、いかえれば生活圏を母胎として生まれ、その生活圏の雰囲気呼吸しながら育つものである。だから、ある地域に生まれた民謡を、いきなり他の地域に移して流行させることは、その民謡に新しく生きる「場」を与えることになり、それはそれとして意味があるわけであるが、本来の意味からいうと、その民謡は一律死滅したことになる。そして新しい生活圏で、新しく生き始めるのである。

さて、「五木の子守唄」をラジオで聞きながら、「五木」という地名に心ひかれる割りには、唄そのものからは感銘をうけなかった。一種の物足りなさが、あとにおりのようにのこった。そ

れはざっとつぎのような事情によるものと思われる。

私は父の勤めの関係から、この五木村で生まれ、六歳までそこで育った。祖母がまだ生きて元氣なころで、私の守りはもっぱら祖母の受持ちであった。よちよち歩きの私を、後ろにからげてくくった袂をとらえながら、あとからついて歩いていたなどという話を、のちに祖母や母の口からよく聞かされたものである。そのころ、祖母が私にどんな唄を歌ってくれたか、私自身には全く記憶がないが、「雀の踊り」の唄を祖母が歌い、私がまだおぼつかない足取りで、手を振り首を振って踊ったというようなことを、当時やはり五木村に住んでいた叔母から、のちになつて笑い話として聞かされたことがある。

ところで、「五木の子守唄」が、いまから五十年前も前に、あの村里で歌われていたかどうか、私は知らない。相当古いものらしいから、歌われていたとしても、だいたいまちがいはなからう。しかし、祖母が土地の子守唄を、私の幼い耳もとで歌ってくれたかどうか、それはさっきの「雀の踊り」の唄と同様、私の記憶のプールには全然影をとどめていない。そのほか、父や母や叔父夫婦にかかわる断片的な記憶は、多分五、六歳ころのものと思われるが、いくらかのこっている。霞網で黒鳥を捕りにゆく父についていって、うまくかかった鳥をはずして持たされたのを、父が網を片づけている間に逃がしてしまつて叱られたことや、家が球磨川の支流の川辺川に沿った所にあり、その川で父の釣ったまだらが、身をひらかれて日干しにしてあったのや、そう

いうことが、きれぎれの影像として、古ぼけた写真のように、心の隅にのこっている。

しかし、それらのあらゆる断片の記憶を集計してもなお及ばぬ、はっきりした一つの記憶、というよりも実感が、私の胸の底のところにある。それは豪宕たる河音のリズムである。名だたるこの急流は、水源の五家荘からまだいくほど離れていない川床を、岸壁にぶつかり、巨岩を乗りこえ、奔騰しながら流下した。私の性格の中に、多少とも激情的な要素があるとすれば、この「自然」のリズムが、人生の出発のころの、ある重大な時期に私の肉体に働きかけたせいだろうと、私は解釈している。なんらかの処理を迫られる事態に、面と向かって立つとき、私の決心と実行を衝迫するものは、そのようなとき際立って高らかに鳴りひびく、この河音のリズムであった。

そして、このリズムに交錯して、あの古朴な「五木の子守唄」が、強く弱くきこえてくるような気がする。いや、これは私の「郷愁」のえがく、一つの幻聴かも知れない。

(昭和二十九年二月)